

## ファウスト伝説の起源

— 1587年のファウスト民衆本と魔術の歴史との関係について —

溝 井 裕 一

はじめに

世界のどの伝説も、実際に起こった歴史的な事件がもととなって形成されてきたのだといわれる。仮にそのとおりだとするならば、ドイツの民間伝説でもっとも有名なもののひとつであるファウスト伝説にもまた、歴史的な起源があるにちがいない。

魔術師ファウストは後にゲーテやハイネ、そしてトーマス・マンなどによって文学的題材としてとりあげられ、非常に有名になったが、彼が15世紀から16世紀にかけて実在した魔術師であったことはあまり知られていない。

彼自身が生きていた時代から、ファウストにまつわる伝説はすでに芽生えていたが、ドイツ人のあいだで彼の伝説を決定的なものにしたのは、実在の人物の死後1587年に出版された『ヨーハン・ファウスト博士の物語』(„*Historia von D. Johann Fausten*“<sup>1</sup>, 1587) というファウスト物語、俗にいうファウスト民衆本であった。

この本は、当時としては大ヒットを記録し、以後11年間だけでも22版を重ねたほどであった。このことから、ファウスト伝説がどれほど人びとの心をひきつけていたかがよく分かるであろう。

ファウスト民衆本は、民衆のあいだに口伝えされていた伝説をまとめたものであるが、ここにはそれを生み出した16世紀の民衆の心理がよく反映されているに違いない。その視点から私は、ファウスト伝説のいったいどこに、ドイツの民衆たちが魅力を感じていたのかを研究し、さらにそこから、たがいに類似点をもつファウスト伝説と魔女伝説を比較する

---

1 原題全体は „*Historia von D. Johann Fausten/ dem weitbeschreyten Zauberer vnd Schwarzkünstler*“ となっている。

ことで、当時の社会がはらんでいた矛盾を描きだしたいと考えている。

今回の論文ではその一環として、まずファウスト伝説の起源について検証したいと思う。より具体的には、実在したファウストとはいかなる者なのか、ファウスト伝説でとくに重要なテーマである魔術とはどのようなものなのか、その起源と歴史を確認するとともに、ファウスト以前の魔術師たちの姿がファウスト伝説にいかに集約されていったかの過程をもみておきたい。そうすることで、ファウスト伝説の起源により深く迫り、その伝説の生成プロセスを明らかにすることができるのではないだろうか。

## I. 実在のファウスト像

ファウスト伝説を調べるにあたって、まずは16世紀に実在したといわれる、後のファウスト像の原型となった人物について触れておかなければならない。ところが実在したファウストについての記録は、ほとんど残っていない。また残された資料もそれぞれに共通した部分が少なく、研究者たちの頭を悩ませている。

歴史上のファウストは、1460年から1470年の間に生まれたとされる。人文主義者フィリップ・メランヒトンが、ファウストは南ドイツの小さな村クニットリンゲンの生まれであると記述している。

ファウストは当時のドイツ人の大多数を占めていた農民の出身とされており、どこで魔術や占星術などの知識を学んだかについては諸説がある。

初めて彼がこの時代の文献に正式に姿を現すのは、僧院長ヨハネス・トリテーミウスの1507年の書簡においてである。

それによるとファウストは、「修士ゲオルギウス・ザベリクス・ファウストゥス2世」(Magister Georgius Sabellicus, Faustus junior)と自称していて、自身を驚異的な魔術師とよんで自慢しているが、実のところ彼は放浪者でありまた詐欺師にすぎないのであって、知識人であるトリテーミウスがゲルンハウゼンにやってくると聞くと、そそくさとそこを立ち去っていったという。

このファウストゥスという姓は、もともと彼の家族名ではなくて、ラテン語の「幸運な人」という意味の言葉に由来する。この時代には、人

文主義の学者がラテン語の名前を名乗ることは普通であった。ただし、150～215年ごろを生きたギリシアの神学者アレクサンドリアのクレメンスの父親がファウストゥス、もしくはファウスティアヌス (Faustianus) という名であったらしく<sup>2</sup>、このことに、かの16世紀の魔術師が着目したという可能性も無視できない。

またザベリクスという姓は、魔術的思考と哲学的思考を融合して「大結合」という概念を創り出した、イタリアの人文主義者ザベリクスに由来するという<sup>3</sup>。名の方のゲオルクは、民衆本ではヨーハンとなっている。したがってこの男は名前に関してすでにあやふやなのである。

彼はゲルンハウゼンにいたとき、プラトンやアリストテレスの失われた記述を復活させることができると発言し、ヴェルツブルクでは、キリストの復活ぐらい再現してやるといきまいていたとされる。さらに1507年クロイツナハでは、ファウストゥスは人びとの願いを聞いてやることができると自慢し、そのあげく錬金術師の技術ぐらい凌駕できることだったそうである。

人文主義者コンラート・ムートによれば、1513年にファウストはエアフルトにあらわれ、学生への講義でホメロスに出てくるギリシアの英雄を蘇らせてみせ、そのうえ彼はパラウスやテレンツの失われた喜劇を再生して学生たちに記述させてやることもできるといった。彼を「改宗」させようとする者まで出てきたが、ファウストゥスは自分は悪魔と血で契約をしており、悪魔は契約を守っているので、自分にも同様の義務があると答えて説得をはねつけたという。

1520年バンベルクにて、彼は大司教のために星占いをして10グルデンを受け取っており、1524～1525年の農民戦争の間はバーゼルにいたらしい。1528年にインゴルシュタットでは追い出され、1532年にはニュルンベルクでも滞在を拒否されている。

バーゼルでファウストゥスと会ったというヨハネス・ガストは、彼の

---

2 Vgl. Tuczay, Christa: *Magie und Magier im Mittelalter*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG, 2003, S. 48f.

3 ハンスヨルク・マウス (金森誠也訳): 『悪魔の友ファウスト博士の真実』、中央公論社、1987年 128ページ参照。

『宴席対話集』(1548)のなかで、ファウストゥスが常に連れ歩いていた悪魔とおぼしき犬と馬について報告している。

マルティン・ルターは1535年と1537年の『卓上語録』で、ファウストゥスを悪魔と契約を交わした者として言及し<sup>4</sup>、メランヒトン<sup>5</sup>はまた、ファウストゥスがいつも黒犬を連れて回っており、その黒犬は実は悪魔なのだとして述べている。しかも彼はファウストゥスが魔術によって皇帝のイタリアでの勝利を可能にしたのであり、またヴェネツィアへの魔法の飛行をも計画していると語った。だがこの話は、もはや実話というより伝説に近い。

1534年、彼はヴェネズエラへ旅に出ているフィリップ・フォン・フッテンのために予言をおこない、その予言のいくつかは実際に的中したという。1539年にはカール5世とフランツ1世の戦争の経過について知りたいという文献学者のヨアヒム・カメラリウスのためにも占いをしている。

やがてシュタウフェンというフライブルクの近くにある街で、ファウストゥスはアントン・フォン・シュタウフェン男爵によって錬金術師として雇われたが、ここが彼の終焉の地となった。1540年か1541年に、彼は壮絶な死を遂げたとされる<sup>5</sup>。実験中の爆死とも、暗殺ともいわれているが、彼の謎めいたその死には結局、宗教関係者に「ファウストゥスは悪魔に魂をさらわれた」といわせる口実を作った。

これらが、伝説のもととなった人物についての資料<sup>6</sup>にもとづく魔術師ファウストの生涯であるが、これだけではやはり、彼が実際にどのような男であったのかを知ることは困難である。

だがこのあやふやさが、かえて彼を伝説化するのに一役買ったと思

---

4 Vgl. Jophen, Schmidt von: *Goethes Faust Erster und Zweiter Teil*. München: Verlag C. H. Beck, 1999, S. 12.

5 ファウストの生年、没年は資料によってばらつきが見られる。

6 Vgl. Jophen 1999, S. 11f.

Vgl. Mahal, Günter: *Faust Museum Knittlingen*. Braunschweig: Georg Westermann Verlag GmbH, 1996, S. 16ff.

Vgl. Friedrich, T. H. / Scheithauer, L. J.: *Kommentar zu Goethes Faust*. Stuttgart: Phillip Reclam jun, 1959, S. 14f.

われる。ファウストが死んだ時、もとから彼のことを快く思っていなかった教会側は、ここぞとばかりに、ファウストの死を悲惨なものとして宣伝し、悪魔と手を結んだ者は必ずこうなるという戒めとして利用しようとした。そして民衆たちは、ファウストに自分たちのかなえられぬ夢をたくし、話を拡大していったことであろう。このようにさまざまな伝奇や思惑が積み重なることで、伝説が醸成されていったのにちがいない。

## II. 1587年のファウスト民衆本

### 1. ファウスト民衆本の登場

1540年か1541年のファウストの死後しばらくして、ファウストにまつわる物語を書いた本が登場した。それはフランクフルト・アム・マインのヨーハン・シュピースという出版業者のもとで、『ヨーハン・ファウスト博士の物語』という題名で1587年に世に送り出されたものである。シュピースのシュパイアーにいる友人という著者は不明であるが、書かれている方言の調査などから、彼がシュパイアー地方の人間であることはほぼ間違いないという<sup>7</sup>。

ペーター・ズクスラントの編集した『ドイツ民衆本3』(„*Deutsche Volksbücher 3*“, 1975)のあとがきに、民衆本の作者について次のような文章がある。

ファウストの生涯と言動については多くの話が巷に流布していた。それらは、ヴォルフエンビュッテル本が作成され、手書きで書かれた民衆本が印刷される以前から、異なった地域ですでに一部存在していた。これらすべての記録をファウスト本の作者が知っていたわけではないにしても、彼は同時代の他の作品の相当数を参考にし、そこからページごと書き写すことも少なくなかった。このことからファウスト本の作者は博識で、恐らく神学の教養も有していた人物であったと結論づけられる<sup>8</sup>。

---

7 Vgl. Suchsland, Peter (Hrsg.): *Deutsche Volksbücher 3*. Leipzig: Verlag Berlin und Weimar, 1975, S. 328.

8 Suchsland 1975, S. 328.

この文章からは、ファウスト本がすでに当時存在していた伝説を多く集めてまとめたものであるという意味も読み取れるようで興味深い。

出版業者シュピーースのもとで出されたファウスト民衆本ではしかし、実在したファウストについての資料はほとんど省みられていない。例えばメランヒトンの報告とは違って、ファウストの出生地はロート・バイ・ヴァイマルということになっているし、また話のなかには、当事世間に流布していた他の魔術師の話が直接取り入れられたり、そのまま借りられてきた物語もあったりする。

したがってこの本の物語すべてを、歴史上の人物に忠実なファウストの原点と考えることはできない。しかしファウストの悪魔との24年間の契約、酒樽や魔法の絨毯に乗っての空中飛行、絶世の美女と称されるヘレナの召還、そしてその凄惨な最期、などのモチーフをもつのはこの本が最初であり、16世紀のファウスト伝説の集大成ともいべきものであるため、当時の人びとの思想や考えを忠実に伝えてくれるという点で、実在のファウスト以上に重要といえることができる。

## 2. ファウスト民衆本のあらすじ

ファウスト民衆本は、序文と3つの大きな章に分かれている。そのなかのあらすじを、今回の論文のテーマに関するところに極力重点を絞って説明しておく。

**序文** まず序文で出版者シュピーースは、魔術を禁じた聖書の教えを引用し、ゾロアスターをはじめとした名高い魔術師の悲惨な最後について触れるとともにファウストに言及し、読者にファウストのような生き方をしないようにとの戒めを説くが、またいかにファウストに関して書かれた本が、世間で待ち望まれているかについても述べている<sup>9</sup>。

**第1章** 物語は、ファウストの出生と学業が語られるところから始まる。ファウストは、優れた才能に恵まれ、神学を優秀な成績でおさめるが、彼は愚かで傲慢であったので、鷲の翼を身につけて、地上と天空の全てを研究し尽くしたいと望む。

この傲慢さゆえに魔術師および錬金術師になり、体裁上は医者となっ

---

9 Vgl. Suchsland 1975, S. 7ff.

たファウストは夜、森のなかで霊メフォストフィレスを呼び出す。悪魔の助けを借りて、普通の人間では得られない知識を手に入れようというのである。彼はメフォストと契約を結び、次の4点を誓う。

1. 霊との24年間の契約の後、ファウストは永遠に彼のものになること
2. 血でその証文を書くこと
3. キリスト教の教えを捨てること
4. キリスト教徒の敵となること

だが契約のあと、ファウストは悪魔に、地獄の様相や、悪魔についていろいろと尋ねるが、メフォストからはじめは天使だったルシファーが、おのれの傲慢さゆえに地獄へ突き落とされて悪魔となった話を聞かされると、ファウスト自身の取った行動もそれと同じことであるのに気づき、魂を売った自分の行為を後悔し始める。彼は悔い改めようとするが、結局メフォストにそれはもう遅すぎるといわれて思いとどまる<sup>10</sup>。

**第2章** この章では当時としては最新の科学知識が紹介されるとともに、ファウストのおこなったヨーロッパをめぐる大旅行が語られる。彼は大旅行のさい、時の権力者であるローマ教皇やトルコのスルタンの屋敷に忍び込んでいろいろないたずらをする<sup>11</sup>。

**第3章** 第3章の前半は、ファウスト博士の魔術を使った物語が中心となっている。例えばカール5世の前で、ファウストはアレクサンダー大王夫妻を登場させてみせる。そしてほかにはティル・オイレンシュピゲルを思わせるいたずら話が展開される。ここでいたずらの対象になるのは、がさつで聞き分けのない農民たち、ユダヤ人、ザルツブルク大司教などである。

後半に入ると、いよいよ24年の契約の期限がせまって、救われることのないファウストの嘆きが描写される。彼はいったん改悔しようとするが、メフォストの恫喝で萎縮してしまい、改悔できない。最後の1年は、

---

10 Vgl. Suchsland 1975, S. 15ff.

11 Vgl. Suchsland 1975, S. 45ff.

ファウストはヘレナを悪魔に呼び出してもらい、一児をもうけて幸せな家庭生活を送る。

残すところ1ヶ月となって、ファウストの嘆きはさらに高まる。そんなファウストをメフォストは嘲るだけである。

最期の日、ファウストは学生たちに今までの魔術はすべて悪魔のものであったことを明かす。そしてその翌日、ファウストはばらばらの死体の姿で発見されることになる。

しかし埋葬された後も、夜になるとファウストは彼の家に現れて、書生のヴァーグナーにいろいろなことを語って聞かせたという。そして最後の結びの文章では、読者方はこの例を見て肝に銘じ、ファウストのような傲慢不遜な考えを持つことなく、悪魔と結託してはならぬ、全力を尽くして悪魔に対抗するように、といった教訓が述べられて物語は完結する<sup>12</sup>。

### 3. ファウスト民衆本の反響

ファウスト民衆本は出版直後たちまちベストセラーになった。1587年の初版は完売し、この年にさらに5版が出ており、その後の100年間には海賊版も9種出まわっている<sup>13</sup>。すでに述べたように、民衆本は1598年までに22版が重ねられた。続編と銘打って、1593年、ファウストの書生であったヴァーグナーが魔術師として活躍する、いわゆるヴァーグナー本も出版されている。さらにファウスト本はオランダ語、フランス語、チェコ語、英語に翻訳された。

その後もさまざまな人物によって編纂しなおされてファウスト民衆本が出版されたが、とりわけ重要なのは1725年出版の民衆本である。「キリスト教の心を持つ者」(Christlich Meynender)と名乗る人物によって書かれた、シュピース版から4冊目にあたるこの本の中身は、ほとんどただのあらすじのみともいえるが、この本は1752年と1820年の間に33版が重ねられ、後のファウスト像に大きな影響を残した。ゲーテもこの

---

12 Vgl. Suchsland 1975, S. 76ff.

13 長谷川 1983年、93ページ参照。

本を読んだ可能性がある<sup>14</sup>。

いったいなぜファウスト本はこのような反響を引き起こしたのでしょうか。そしてこの本の内容の、どのような点が受けたのか。これらの問題を考えるために、ファウスト民衆本で大きな位置を占めている魔術というものの起源を知っておくことは重要である。次の章では、魔術の歴史をファウストと魔術の関係もからめつつ見ていくことにする。

### Ⅲ. ファウストの魔術の起源と歴史

#### 1. 魔術の起源

魔術というのは、人間の歴史の始まりとともに存在したという。『魔術の歴史』の著者リチャード・キャベンディッシュによれば、人間の周辺に起こる不可解な超自然現象に、説明をつけようとするのが科学、崇拝するのが宗教、そしてこの超自然的な力をコントロールしようとするのが魔術である<sup>15</sup>。

だが、そもそも宗教と魔術、科学と魔術の境い目は、非常にあいまいである。したがってこの魔術の定義は、すべての魔術のと解釈されるような事例にあてはまらないことを、常に意識しておかなければならない。

しかし、ファウストの時代まで伝えられてきた魔術の歴史にスポットライトを当てれば、かつて魔術とはどのようなものと考えられていたのか、ある程度は分かるのではないだろうか。

古代社会における魔術の実行者は、ユーラシア大陸の各地に広く分布したシャーマンたちであるという。彼らは、自己の肉体から離れ、遠くの出来事を見たり、未来を予見したり、天界、下界を見たり、死者を蘇らせたり、動物と意思疎通ができ、姿を消し、飛ぶことができるという特殊な能力を持っていたとされる<sup>16</sup>。

シャーマンたちは土着宗教の担い手であって、厳密には魔術師ではないが、後に解説するように、彼らの能力はファウストを含む魔術師たち

---

14 道家 1974、36ページ以下参照。

15 キャベンディッシュ（梅正行訳）：『魔術の歴史』、河出書房新社、1997年、7ページ参照。

16 キャベンディッシュ 1997年、10ページ以下参照。

に受け継がれている。

## 2. メソポタミアの魔術

魔術師ファウストの魔術と、ヨーロッパの魔女の魔術とは、もともと起源が異なっている。ファウストが後におこなう魔術と密接にかかわっている地は、メソポタミア（カルデア）、ペルシア、エジプト、ユダヤなどのオリエントであり、これらの魔術の伝統はギリシア、ローマ帝国へと受け継がれていく。

ティグリス・ユーフラテス川流域に誕生したメソポタミア文明では、善なる霊と悪なる霊が同居する、非常に不安定な世界観が存在していたという。したがって人びとは、善なる霊に呪文を唱えて祈ることによって、邪悪な魔物から身を守ろうとした。そして同じ呪術を利用して、人間に害悪をなす呪術師も存在すると考えられた。メソポタミアの人びとは、魔物のほかに人間のなかにも、危険な力が備わっていると信じていたようである<sup>17</sup>。

メソポタミア文明を継承するカルデア（古代バビロニア南部）の人びとはまた、天の運行から未来の出来事を読みとろうとしたので、占星術が発展し、有名な「黄道十二宮」も考え出された。また当時の占星術師が金属と惑星のあいだに関係を求めていたことは、中世の錬金術師に影響を及ぼしている<sup>18</sup>。占星術は、ペルシア王クセルクセスのギリシア遠征、アレクサンダー大王の遠征、そしてローマ帝国などを通じて、ヨーロッパに入りこむことになる。実在のファウストが星占いをしていたことは、先に述べたとおりである。

## 3. ペルシア、エジプト、ユダヤ人の魔術

ペルシアでおこったゾロアスター教は、天使と魔物、最後の審判、救世主の到来などの非常に重要な思想をキリスト教にもたらし、そのヨーロッパの宗教的思想への影響には計り知れないものがあったが、同時に

---

17 カート・セリグマン著（平田寛訳）：『魔法—その歴史と正体』、人文書院、1991年、11ページ以下参照。

18 セリグマン 1991年、20ページ以下参照。

魔術の思想にもかなりの影響を及ぼした。

マジとよばれていたペルシアのゾロアスター教の司祭は、紀元前5世紀かそれ以前にギリシア人と接触した。古代ギリシアやローマで彼らがおこなったこととして報告されているのは、それほど詳しくはないが、「占星術に携わっていたこと、医者として働き、非常に手の込んだ、しかしかわしい治療の儀式をしたこと、そして全体的に『隠された物事の知識』を得ようと務めていたこと」<sup>19</sup>であった。ギリシア人らはマジたちがすること、あるいはそれに類似した怪しげな行為を「マジのわざ」とか、「マジ的なわざ」あるいは単にマギー (Magie) とよんだ<sup>20</sup>。ここから分かるように、魔術を意味するドイツ語の „Magie“ は、もともとゾロアスター教の司祭マジに由来するのである。

エジプトも魔術の故郷として有名である。かつてエジプトのその特徴的な文字には、神秘的な力があると考えられていたらしく、ピタゴラスやアポロニオスといった、魔術の歴史で重要な人物がそこへ研究しにいったという。

エジプトに由来する魔術書としては、ギリシア語で「3倍も偉大なヘルメス」という意味を名にもつ、エジプトのヘルメス・トリスメギストゥス (Hermes Trismegistus) なる人物が書き残したとされる、ヘルメス文書がとくに有名である。ヘルメスはもともとギリシアの神であるが、その賢さと発明の才にかけてはきわ立っており、エジプトの神トートと同一視された。その彼のものとされた文書の内容は、以後数百年にわたって数々の修正や翻訳のなかで変化していった<sup>21</sup>。

ヘルメス文書は2～3世紀ごろのものとされるが、一部は紀元前1世紀にまでさかのぼるといわれる。この書は古代エジプトや古代ギリシアにおける密儀宗教のほか、新プラトン主義の思想に影響を与えている<sup>22</sup>。

---

19 Kieckhefer, Richard: *Magie im Mittelalter*. München: Verlag C. H. Beck, 1992, S. 19.

20 Vgl. Kieckhefer 1992, S. 19.

21 Vgl. Kieckhefer 1992, S. 37.

22 Vgl. Brockhaus: *Brockhaus-Enzyklopädie in 24 Bänden*, Neunter Band. Leipzig-Mannheim: F. A. Brockhaus, 1997, S. 727.

ヘルメス文書は土着の文化がヘレニズムと習合することで生まれ、占星術、錬金術、悪魔術の宝庫になっているという<sup>23</sup>。そしてこの本の次のような文章は、魔術師たちをおおいに刺激したのであった。

汝は汝と神を等しくしなければ神を理解することあたわず。同類は同類により理解されうる。全ての身体より抜けでて、自己を計り知れぬ大きさへと拡げよ。すべての時より抜け、永遠となれ。かくして汝は神を知る…。己自身のうちにあらゆる被創造物、火、水、乾、湿の感覚を取り込め、海、陸、空のいずれの場にも同時にあれ。同時に、産まれる以前の存在、子宮の内部の存在、若者、老人、死者、そして死後の状態であれ。もし汝、これら時間、場所、もの、質と量といったものすべてを汝の思考に取り入れれば、汝は神を知りうるであろう<sup>24</sup>。

この「神と自己を等しくする」という思想こそ、キリスト教から見れば非難されてしかるべきであった。民衆本におけるファウストと悪魔の長ルシファーの対比もここに由来する。ファウストは、魔術師の伝統ののっとなって、「鷲の翼を身につけて」高みに昇ることで自らを神に近づけようとし、結果としてルシファーと同様に地獄に落ちる。ヘルメス文書は、ルネサンス時代にフィレンツェでメディチ家の依頼を受けた、新プラトン主義者マルシリオ・フィッチーノによって翻訳された。

ユダヤ人も、魔術の発展に大きく寄与した。ユダヤ文字には、神秘的な意味が秘められていると信じられていたし、ユダヤの王ソロモンの伝説は注目値する。ソロモンもまた民衆本のファウストと同じく、その優れた知恵から神に自分を近づけようとして神と敵対し、破滅を招くのである<sup>25</sup>。

また中世にはユダヤ人のあいだで、カバラという神秘主義思想が起こった。最初のカバラに関する書物は12世紀に南フランスで書かれたとさ

---

23 上山安敏：『魔女とキリスト教』、株式会社講談社、1998年、269ページ参照。

24 キャベンディッシュ 1997年、32ページ以下。

25 キャベンディッシュ 1997年、87ページ以下参照。

れる。カバラは特権階級における秘密の教義として発達したが、やがて世間一般に広まり、民間信仰や魔術などにも結びついていったという<sup>26</sup>。カバラには、神とイスラエルの国民の聖なる結婚という思想があった。カバリストたちは、真夜中に神との聖婚と神の臨在を経験したという<sup>27</sup>。カバラは、階層化された宇宙を昇って天に近づこうとする試みであったともいわれる。

#### 4. グノーシスの魔術

さらに時代が下るが、ローマ帝国が繁栄していた1～3世紀ごろ、地中海沿岸でグノーシス主義という、宗教思想運動が栄えた。

グノーシス主義が誕生したエジプトのアレクサンドリアは、西洋と東洋の思想、精神が混ざり合う地であった。グノーシス主義の起源はキリスト教よりも古いといわれる<sup>28</sup>。この思想には、バビロニアの占星術、エジプトの魔術と宗教、ゾロアスター教、ギリシア哲学、ユダヤ教、そしてキリスト教などさまざまな要素が見られるという<sup>29</sup>。グノーシス主義は、とくに蛇崇拜で有名である。

キリスト教徒を悪い魔法使いであると非難したグノーシス派の異教徒ケルススは、ある特徴的なダイアグラム図表について語っている。そのダイアグラムは、魂を表現する大きな輪のなかにある10個の小さな輪でなりたっているが、そのうちの7つの輪は7人の動物の頭をした霊たちと考えられていて、これは7つの惑星と符合する。グノーシスのダイアグラムはおそらく、ファウストが霊を呼び出すときに、自分の周りに描く輪と関係があるだろう。

このダイアグラムには、天を7つの階層に分け、そこを順にはしごの助けを得て昇っていくという思想がこめられていた。それぞれの天には金属製のドアがあって、その金属は惑星たちの性質と結びつく。例えば

---

26 Vgl. Brockhaus: *Brockhaus-Enzyklopädie in 24 Bänden*, Elfter Band. Leipzig-Mannheim: F. A. Brockhaus, 1997, S. 329.

27 上山 1998年、52ページ以下参照。

28 Vgl. Tuczay 2003, S. 56.

29 セリグマン 1991年、103ページ以下参照。

土星は鉛、木星は銅といった具合である。この占星術と金属のつながりは、中世の錬金術にも見られるものである<sup>30</sup>。

グノーシスのもつ、天の階層を昇っていくという考え方には、ヘルメス文書に見られる思想と同様、自分を神に近づけようとする思想が隠れているのが分かる。グノーシスは、おそらくキリスト教が魔術をひとくくりにする以前から、各地の魔術的思想を集めさせ始めていたと思われる。そしてグノーシス主義に属する有名な魔術師シモン・マグスこそ、後のファウスト伝説に決定的な影響を残した人物であった。彼については、第4章で詳しく述べたい。

## 5. キリスト教と魔術

キリスト教を世界で初めて国教としたローマ帝国は、地中海周辺地域を治める広大な国家であったため、そこでは各地域から魔術的思想が流入し、魔術同士が混ざり合っていた。

かつて古代ギリシア人やローマ人は、神託という形で神々から未来についてうかがいをたてていたが、教父アウグスティヌスや他の初期キリスト教文献の著者たちからすれば、こうした神々は悪霊にすぎなかった<sup>31</sup>。このため彼らは古代の神々による神託は魔術であるとした。そしてこうした占いをおこなっている異教徒は、意識するしないにかかわらずデーモンと結託していると考えられた。

かつての土着宗教が悪魔と結びつけられていることは、中世における魔女のサバトのイメージを見てもよく分かるであろう。キリスト教は精神に重きをおき、異教に見られる肉体的な豊穡の儀式を否定した。やがて悪魔は、かつて自然宗教が重視していた自然、物質、肉欲、そして女性の象徴となったといわれる。同時にギリシア世界では豊穡神であったパンという男の神の、雄山羊の足という特徴もまた、中世における悪魔の容貌に継承されている<sup>32</sup>。

---

30 Vgl. Tuczay 2003, S. 57f.

31 Vgl. Kieckhefer 1992, S. 19f.

32 Vgl. Bauer, Wolfgang / Dümotz, Irmtraud / Golowin, Sergius: *Lexikon der Symbole*. München: Wilhelm Heyne Verlag, 1997, S. 208ff.

6～7世紀に生きた教会博士イシドール・フォン・セビラは、魔術と彼が呼んだものをかなり具体的に述べている。セビラは魔術として地、水、火、空から得られる情報をもとにした占い行為や、鳥の飛び方や鳴き声、生け贄にした動物のはらわた、あるいは星や惑星の運行から未来を予期する可能性、まじない (Beschwörung、魔術的決まり文句の朗読)、リガトゥア (Ligatur、魔術的なものを病人に結びつけて治療する行為) などを挙げ、これらにはすべて人間と悪の天使との結託によってなされる悪魔的な技術が要求されるとした<sup>33</sup>。これを見れば、かつての異教の風習がいかにして魔術の名のもとに集約されているのかがよく分かる。

こうしたことから、ヨーロッパ魔術という不思議な分野は北欧、南欧、地中海、そしてオリエントなどの地方で起こったさまざまな異教的思想が、アレクサンダー大王の遠征やローマ帝国、グノーシス主義を通じて収束され、最終的にキリスト教のもとで魔術として、魔女の大釜の中身のように、ごった煮にされて誕生したものであると考えることはできないだろうか。キリスト教がヨーロッパ魔術を育てたとさえいえるかもしれない。

それでも中世のキリスト教の力が強かった時代には、教会権力によって魔術は押さえつけられていた。それは聖書の持つ不合理な面でさえ合理的に解釈しようとするスコラ哲学の影響もあったようである。しかし中世の後期になって教会権力が衰退すると、古典を復活させようとするルネサンス運動が始まる。この運動のなかでは、ギリシア哲学のような学問だけでなく、かつて栄えた魔術や占星術、錬金術にも人びとの関心が向けられるようになった。ファウスト民衆本の出版や魔女狩りには、魔術の復活という時代背景もあったのである。

#### IV. ファウスト伝説と魔術師たち

##### 1. 古代の魔術師たちとファウストの共通点

ファウスト民衆本で披露された物語の背後には、ファウストが登場する以前に生きた魔術師たちの影が見え隠れしている。そしてその筆頭に

---

33 Vgl. Kieckhefer 1992, S. 20f.

あるのが、グノーシス派の有名なサマリアのシモンこと、魔術師シモン・マグスである。彼は民衆本のなかで、敬虔な老人がファウストを説得する時に引きあいに出される人物である。

魔術師シモンは偽クレメンس文書のなかで、ペテロやパウロなどの使徒のライバルとして登場している。ラテン語版の „*Recognitionen*“ という題をもつこの本では、シモンは以下のようなことをおこなった人物とされている。

シモンは彼の技術を自慢していた：例えば彼は姿を消したり、山や岩を通り抜けたり、火や水の上を歩いたり、あらゆる枷を引きちぎったり、ひとを動物に変えたり、彫像をしゃべらせて、その2、3の像に名のらせることもできたという。また彼はホームクルス（人造人間）を造りだした後、またそれを殺したが、その証拠として「肖像」を保管することは忘れなかったと主張した。彼はいく先々で大騒動をまきおこし、それにはルナもしくはヘレナという彼の同行者も多少かかわっている。また切迫している逮捕から逃れるために、クレメンスの父親ファウストゥスの姿をし、ファウストゥスに彼自身の姿をさせて、代わりに逮捕されるようにした<sup>34</sup>。

シモンは不思議な力を示して、まるで彼が神であるかのように尊敬されるのを望んでいたらしく、それは自分の能力にうぬぼれる民衆本のファウストに自然と重なる。

またファウスト伝説とシモン伝説をつなげる重要なモチーフとして、ヘレナという存在がある。ヘレナはもちろんトロヤ戦争のきっかけをつくった女性であるが、グノーシスの伝説では人間の魂の寓喩となっている。シモンはヘレナを人類の母、迷える羊、肉体化した聖霊の思想、「知」（*Sophia*）であるとしたが、殉教者ユスティヌスは彼女を売春婦よばわりしている<sup>35</sup>。民衆本のなかでヘレナとともにいるファウストは、シモンを彷彿とさせずにはおかない。シモンが作り出したと主張している

---

34 Tuczay 2003, S. 49.

35 Vgl. Tuczay 2003, S. 57.

ホームクルスは、民衆本には登場しないがゲーテの『ファウスト第2部』には見られるモチーフである。このようにシモンはファウスト伝説に大きな影響を残した。メルヒェンなどと同じく、ファウスト伝説に見られるモチーフの多くも、伝説形成期に生きた人びとの発案したものではなく、そのずっと前から受け継がれてきたものなのである。

シモンの他には、紀元前500年ごろに生きていたピタゴラス、紀元前600年ごろのトラキアのオルフェウス、シチリアのエンペドクレス、クレタのエピメニデスそしてアポロニオスなどといった魔術師たちの伝説も見逃せない。

ピタゴラスについて語られていることは、出生前の予告、神的な起源、下界への旅、魔術対決における勝利、訴追、そして非業の死などである。そのピタゴラスの一番弟子であったと伝えられるティアナのアポロニオスについても、似たようなことがいい伝えられている。アポロニオスはバビロニア、エジプト、ギリシア、イタリア、そしてインドにまで及ぶ広大な旅をおこなった。また彼はいったん洞窟のなかに姿を消すが、再び現われる。彼はまた死者の復活、悪魔払い、予言、奇跡の治癒、死者の呼び出しといった能力をもっていた<sup>36</sup>。

ファウスト民衆本に書かれた物語と比べるために、伝説上これらの魔術師がもっていたとされる特徴を挙げてみると次のようになる。

1. 病を癒す能力がある（ピタゴラス、アポロニオス、エンペドクレス、シモン）
2. 未来を予知する（ピタゴラス、アポロニオス、エンペドクレス）
3. 風や雷などの自然を支配する力がある（ピタゴラス、エンペドクレス）
4. 下界に降りる（ピタゴラス、アポロニオス、エピメニデス）
5. 動物を従える（ピタゴラス、オルフェウス）
6. 瞬間移動ができ、遠く離れた地での出来事を見られる（アポロニオス、エピメニデス）
7. 突然の不可解な死（アポロニオス、エンペドクレス、オルフェウス）

---

36 Vgl. Tuczay 2003, S. 25.

ス)

8. 死からの再生 (アポロニオス)
9. 神と自己を同一視する (アポロニオス、エンペドクレス、シモン)
10. 自らを見えなくしたり、像を笑わせたり踊らせたりできる (シモン)

彼らのこうした能力は、実のところかつてシャーマンが持っていたとされる超能力とほとんど変わらない。この点からもシャーマンの能力が後の魔術師たちに受け継がれていったことがよく分かる。

E. R. ドッズも『ギリシア人と非理性』 („*The Greeks and the Irrational*“, 1957) のなかで、オルフェウス、ピタゴラス、エンペドクレス、そしてエピメニデスといった人物を、シャーマンと表現している<sup>37</sup>。シャーマンの通過儀礼というものは、選ばれたひとが恍惚状態と下界に降りるという行為を体験することに特色づけられるという。このさい霊たちがシャーマンたちの体を斬り刻んで骨格だけにし、それにまた新たな肉をつけることで、彼らは自分の守護霊と霊の力を獲得するにいたる<sup>38</sup>。

さらにこれらの伝説と、ファウスト民衆本の内容を比べれば、ファウストも彼らと共通する能力を持っていることが分かる。彼は自分の優れた能力から、おのれを神ではないかとうぬぼれる。自分の姿を見えなくすることもできるし、さらに彼は未来の出来事を知ることができるために、暦を書くこともできる。彼は鳥を自由に呼び寄せられるし、瞬間移動ではないが、離れた地域を絨毯や羽根の生えた馬で早く移動できる。そして彼は突然の死をむかえるが、幽霊として再生する。これらはすべて他の魔術師の伝説と共通点を持っている。

ファウストの地獄への旅は、シャーマンの下界に降りるという行為を連想させるが、これは民衆本におけるファウストの死の場面も同様である。ファウストが霊によって体を「ばらばらにされた」ことを考えると、ここでもまた「霊によって体を斬り刻まれる」というシャーマンの通過

---

37 Vgl. Dodds, E. R.: *The Greeks and the Irrational*. Boston: Beacon Press, 1957, S. 141ff.

38 Vgl. Tuczay 2003, S. 23f.

儀礼のモチーフが受け継がれているのではないだろうか。

## 2. 魔術師とキリスト

またさらにこうした魔術師の能力は、キリストの能力にも似ている。このことは、キリスト教にとって非常に厄介な問題であった。魔術師のなかにはファウストのように、キリストの奇跡ぐらい自分でもおこなえると豪語する者さえ存在した。

魔術師として有名なアポロニオスも、キリストと比べられることがあった。もともと出所が怪しいといわれる聖書外典で、アラブ地方に由来するものには、イエスの子供時代について書かれているが、その内容はアポロニオスの生涯を描いた話に驚くほど似ているといわれる<sup>39</sup>。またアポロニオスの崇拝者は、キリストを彼の後継者と見なしていたため、その教えをキリストの教えよりも高く見ていたという<sup>40</sup>。

キリスト自身、魔術的な力をもっているとして注目の対象となってきた。彼は、液体をワインに変えたり、マルタ島で毒蛇から聖パウロを守ったり、若者らに怪物に対抗するための力を与えたりしたと伝えられている。このため15世紀から16世紀に生きたヨハネス・ロイヒリンなどは、十字を切りながらキリストの名を使うことで、最高の魔術的威力が発揮できるものと考えていた<sup>41</sup>。

キリストと魔術師が類似していることを示す例は他にもある。ヨーク出身の劇作家による中世の宗教劇のなかでの、イエスが捕縛された時の裁判の様子は、ちょうど当時のイングランドにおける、魔術の疑いによる裁判のやり方を思い起こさせるものだという。この劇のなかではユダヤの大司祭たちは、イエスの奇跡を魔術的な能力といい、悪魔のしわざによるものだととる。したがって彼は死罪にあたいすると解釈されるのである<sup>42</sup>。

それに加えて魔術師は、たびたびキリストの使徒たちとも張りあって

---

39 Vgl. Tuczay 2003, S. 45.

40 Vgl. Tuczay 2003, S. 26.

41 Vgl. Kieckhefer 1992, S. 173.

42 Vgl. Tuczay 2003, S. 44.

いる。例えば聖書外典のペテローパウロ文書のなかで、シモン・マグスは死者を蘇らせる技術でペテロと勝負している。この試みにペテロは成功したが、シモンは失敗した。またシモンはペテロを殺そうとして巨大な犬たちをけしかけるが、ペテロが聖別したパンを与えると、犬は煙になってしまう。

この対決はエスカレートし、ついにシモンは大衆の前で空を飛ぶことを示して、その力を証明しなければならなくなる。そして実際彼は飛ぶことに成功するが、ペテロは彼が悪霊によって支えられているのを見てとった。ペテロが祈りを始めたために悪霊は力を失い、シモンは地面にたたきつけられる<sup>43</sup>。

ペテロだけでなくパウロもバール・イエズスもしくはエリマスとよばれる魔術師と対決し、相手を盲目にしてしまうという<sup>44</sup>。このような場合、魔術師の魔術と使徒の奇跡をどのように見分けるのかは困難で、ほとんど見る側の立場によって受けとり方が左右されることになる。魔術師は、キリストや聖者たちのライバルとなる危険を常に秘めていたのである。このため彼らは、教会が常に非難しておかなければならない存在であったと考えられる。

またキリストにまつわる逸話と、ファウスト民衆本の物語に共通するモチーフとしては、死後の復活がある。民衆本にはファウストは死後亡霊となって、再び自分の家に現れたと書かれている。

そして民衆本以外に存在するファウストの伝説にも、ファウストがみごと死後蘇ったとする話がある。

その例を挙げてみると、マウルブロンに伝わる伝説では、「ファウストに死期が近づいた時、彼は下男に、彼の遺体を剣でバラバラに斬り、それをたらいに押し込んで燃えている暖炉の裏に置くよう指示した。すると彼はもとどおりになってそこから出てきた」<sup>45</sup>。あるいはノイ・ルピンの伝説には、「彼の死後もしばらくの間彼がDikkicht（おそらく Dickicht、

---

43 Vgl. Tuczay 2003, S. 49f.

44 Vgl. Tuczay 2003, S. 46.

45 Bächtold-Stäubli, Hanns (Hrsg.): *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*, Zweiter Band. Berlin: Walter de Gruyter GmbH & Co. KG, 10785, 2000, S. 1273f.

茂み)で多くの人と座ってカードで遊んでいるところが目撃された」<sup>46</sup>とある。こうした伝説から、キリストの再生を連想するのは容易である<sup>47</sup>。また、民衆本でファウストが死ぬ1日前に学生たちの前でおこなう演説は、聖書でいう最後の晩餐のパロディであったとも考えられるであろう。

### 3. ルネサンス時代の魔術師とファウスト

中世のキリスト教の時代を経てルネサンス期になると、古代の魔術を研究しようとする者が多く現れはじめた。その代表はアグリッパ・フォン・ネットスハイムやパラケルススらである。彼らにまわりついた魔術師としての評判は、後にファウスト伝説に合流することになった。

先にも述べたように、イタリアのメディチ家に世話になっていたフィッチーノは、ヘルメス文書のテキストを手に入れ、それを翻訳した。この書は当時の魔術師たちの欠かせない教本となったが、フィッチーノ自身魔術と関係のある人物である。

フィッチーノは新プラトン主義に属していたが、新プラトン主義の祖で3世紀に生きたプロティノスは、自然全体が魔術的な影響に織り混ぜられているという思想を持っていた。フィッチーノは霊(デーモン)というものは宇宙のどこにでも存在し、天体から霊たちが力を地上に伝達していると考えた。そして魔術師の仕事はその特性に応じた力を知り、分類し、使用可能にすることであった<sup>48</sup>。しかしこの「霊の力を使用する」という考えは、うっかりすると悪魔を呼び出して従わせようとする、黒魔術とまちがえられる可能性が常にあったと思われる。

さらに彼の弟子ジョヴァンニ・ピコ・デラ・ミランドラは、ユダヤ教のカバラをキリスト教に導入しようと試みている。それはドイツのヨハネス・ロイヒリンを通してトリテーミアスとアグリッパに影響を与えた。

カバラのほかにヘブライ文字にもまた、ルネサンス時代の魔術師は注目した。ピコ・デラ・ミランドラやロイヒリンは、ヘブライ語に隠され

---

46 Bächtold-Stäubli 2000, S. 1274.

47 ファウストが死ぬときに「斬り刻まれ」、そのあと復活するというモチーフは、シャーマンの下界への旅にも通ずるものである。

48 Vgl. Kieckhefer 1992, S. 170.

た力が秘められていると考えて研究したという<sup>49</sup>。

偉大な魔術師ならびに占星術師アグリッパは、カバラやヘルメス文書を重んじ、彼もカバラによって魂が体から抜け出て天空を旅したというが、白魔術師という本人の主張にもかかわらず、黒魔術師としての評判がたてられた<sup>50</sup>。アグリッパは黒い犬を連れていたといわれるが、これもまたうわさの種となった。「アグリッパについては、彼自身が偉大な魔法使いであって、彼の犬は彼に奉仕する立場にいた悪霊であり、彼の死後消えてしまったと信じられていた」<sup>51</sup>という。同じことがファウストについても同時代人によって述べられているが、これはどうやらアグリッパの伝説から受け継いだものようである。

ファウスト伝説に大きな影響を与えたといわれるもう一人の人物に、パラケルススがいる。彼もファウストとほぼ同じ時代を生きていたが、非常に研究熱心な人文主義者で、占星術や錬金術について豊富な知識があったのみならず、医学に多大な貢献をした。

パラケルススがファウストと似ているところはいろいろある。まず彼は放浪を繰り返した。とくに、彼のおこなったヨーロッパ中を股にかけた大旅行は、民衆本で描かれたファウストの大旅行に影響を与えたのではないかと思われるほどである。パラケルススは、非常にまじめなところがあったけれども、大酒飲みで、よく奇矯な発言をした。そして彼の卓抜した医学の知識は、当時の人びとから見ると、魔術とも映りかねなかった。そのため彼はひとつの場所に腰を落ち着けることができず、ファウスト同様地元の政府と衝突を繰り返して、住むところを転々としなければならなかった。またパラケルススは一人の弟子を持っていたが、彼はファウスト民衆本に登場するヴァーグナーを連想させずにはおかない<sup>52</sup>。

さらにパラケルススとファウストの死亡した時期は、奇しくもほぼ一

---

49 Vgl. Kieckhefer 1992, S. 171ff.

50 キャベンディッシュ 1997年、131ページ以下参照。

51 Bächtold-Stäubli, Hanns (Hrsg.): *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*, Erster Band. Berlin: Walter de Gruyter GmbH & Co. KG, 10785, 2000, S. 223.

52 長谷川 1983年、59ページ以下参照。

致する。この事実もまた、パラケルススとファウストにまつわる話が混ざり合う機会を与えたことであろう。

どうやらファウストは、ルネサンスの魔術復興期に、ヘルメス思想、ネオプラトニズム、カバラ思想などを導入したこれらの人びとの潮流を汲む人間であったようである。しかし彼がトリテーミウスが非難したようないかさま師であったのか、あるいははれっきとした学者であったのかは、あまりよくわかってはいない。しかし実在したファウストの上に、古代の魔術師や近代の魔術師と呼ばれた人びとの噂や伝説が積み上げられていって、ファウスト伝説が誕生したことは間違いないところであろう。

おわりに

ファウストと魔術、そして魔術師の関係を見ていくには、民衆本の登場した16世紀よりずっと前までさかのぼらなくてはならない。

魔術は人類の歴史の始まりとともに存在したといわれるが、民衆本にみられるファウストの魔術は、オリエントをはじめとして地中海、北歐、南欧などの各地域に存在していた魔術的思想が、アレクサンダー大王の遠征やローマ帝国などを通して、混合することで生まれたものである。それに加えてキリスト教が異教的な要素をも魔術的と解釈したことで、魔術の範囲はさらに拡大した。

そして魔術師の伝説もまた、シャーマンたちがユーラシア大陸中に存在していた原始時代から、一貫して続いている。紀元前500～600年ごろに生きたアポロニオスなどの魔術師たちは、シャーマンの能力をはっきりと受け継いでいたが、彼らの伝説の延長上にある16世紀のファウスト像のなかにも、まだシャーマンの面影をうかがい知ることができる。またファウスト民衆本における魔術物語のモチーフの多くは、シモン・マグスをはじめとする古代の魔術師や、ルネサンス時代の魔術師にまつわる伝説を継承したものであった。

古代からルネサンス時代までの魔術師たちに共通していることは、彼らが天の階層を昇って高みに近づくことができると信じていたことである。そうした魔術師の姿はファウスト民衆本にも取り入れられている。さらに魔術師は、ことあるごとにキリストや聖者たちと張りあってきた。

彼らは宗教とはどうしても相容れない存在であったといえるであろう。

魔術師の歴史を見ても分かるように、ファウスト伝説の誕生は16世紀特有の現象などではない。しかしそうはいっても、ファウスト伝説が他の魔術師伝説よりもはるかに広まったのは、それなりの時代背景があったためだと見るべきである。15～16世紀は、ルネサンスの古典復興運動にあわせて古代の占星術、錬金術、そして魔術が復活してきた時代であった。そのような流れのなかで出版されたファウスト民衆本は、単にファウスト伝説の集大成であるばかりでなく、魔術や魔術師に対して人びとが抱いてきたイメージの集大成であったともいえるであろう。

## Die Entstehung der Faust-Sagen

— Das Faust-Volksbuch vom Jahr 1587  
und sein magiegeschichtlicher Hintergrund —

Yuichi MIZOI

Der Faust-Stoff ist einer der bekanntesten Sagen in Deutschland. Doch viele Leute wissen wenig von Fausts wirklicher Existenz. Er soll zwischen 1460 und 1541(?) gelebt haben. 1507 berichtete Johannes Trithemius, dass der Magier sich „Magister Georgius Sabellicus, Faustus junior“ genannt hat. Faustus starb überraschend in Staufen, aber es bleibt bis heute ein Rätsel, wie er gestorben ist. Das Leben Fausts bleibt im Grunde weitgehend ungeklärt. Doch, bzw. gerade deshalb, haben seine Zeitgenossen über ihn viel phantasiert. Anstelle einer Biographie konnten sich Sagen und Legenden heraus bilden.

Nach dieser Frage zur Existenz von Faust werde ich das Erscheinen des Faust-Buches behandeln: Nach Fausts Tod erschien 1587 ein anonymes „Volksbuch“ in einem Frankfurter Verlag unter dem Titel „Historia von D. Johann Fausten, dem weitbeschreyten Zauberer vnd Schwarzkünstler“. Dieses Buch war damals so beliebt, dass es in den

folgenden elf Jahren 22 mal verlegt wurde. Allein von daher leuchtet ein, dass das Faust-Thema damals Interesse auf sich zog. Ich gehe davon aus, dass man aus diesem Buch geistige Strömungen im Volk während des 16. Jahrhunderts gut erschließen kann und frage von daher nach der Beliebtheit der Faust-Sagen.

Das wichtige Hauptthema dieser Arbeit (Teil 3) ist, das Faust-Buch von der Magie-Tradition her zu betrachten. Um das Buch zu verstehen, muss man wissen, was „Magie“ eigentlich ist. Sie wurde wiederholt als Versuch definiert, übernatürliche Kraft zu *kontrollieren*. Doch ist es schwer, „Magie“ bündig zu definieren, weil der Begriff in Teilen in den Bereich der Wissenschaft und auch der Religion reicht. Doch mag ein historischer Überblick des Begriffs zu seinem Verständnis beitragen. Die Faust-Magie stammt aus dem Orient. Der Aufsatz untersucht daher, wie verschiedenartige Magie aus dem Orient nach Europa kam und dort vereinigt wurden.

Im vierten Teil werde ich die Faustfigur im Volksbuch mit geschichtlich realen Magiern vergleichen. Für die Faust-Geschichte des Volksbuchs spielt einer der bekanntesten Magier, Simon Magus, eine wichtige Rolle. Er war ein Vertreter der Gnosis (eine esoterische philosophische Richtung im 1-3. Jahrhundert n. Chr.). Wie Christa Tuczay in ihrem Buch „*Magie und Magier im Mittelalter*“ (2003) sagt, waren die Magier der Antike (Simon auch) später manchmal als Rivale der Heiligen angesehen. Darüber hinaus behandle ich weitere Gemeinsamkeiten zwischen Faust und den Magiern der Antike. Die Magier in der Renaissance-Zeit haben dann in einem weiteren Schritt auf die Faust-Sagen gewirkt. Viel Hörensagen über Magier der Renaissance-Zeit floss in die Faust-Sage ein. Ich stelle abschließend die Frage, welche Kräfte die Magier dieser Zeit nutzen wollten und warum Magie damals wiederaufgekommen ist.

Mit der Arbeit möchte ich zum Thema beitragen, in welcher Weise Magie- und Magier-Tradition aus der Antike in das 16. Jahrhundert überliefert und damit auch diese Tradition im Faust-Buch übernommen wurde und welche Motive im einzelnen hierbei aus älterer Zeit auf

das Faust-Buch Einflüsse hatten. Ich werde dabei zu dem vorläufigen Schluss kommen, dass das Faust-Volksbuch vom Jahr 1587 als eine Zusammenfassung der Magie- und Magier-Geschichte bis zum 16. Jahrhundert angesehen werden kann.